

演題 5

本学小児歯科診療室における各種歯冠修復処置に関する実態調査

(I) 歯種別・年齢別処置状況

○古澤潤一・細矢由美子・行成哲弘、後藤譲治
(長大・歯・小児歯)

目的：近年、接着性レジン並びに可視光線重合型コンポジットレジンの出現により、小児歯科領域における歯冠修復処置法も以前と比較して変化が認められる。今回我々は、本学小児歯科診療室が開設された昭和58年度から昭和60年度の3年度に亘り、本学小児歯科診療室で乳歯並びに永久歯に対して施された各種歯冠修復処置を、歯種別及び年齢別に調査した。

調査方法：調査の対象は、昭和58年度から昭和60年度に亘り、初回来院後引き続き何らかの歯冠修復処置を受けた976名の患児に対して施された歯冠修復処置6,610例である。調査は、小児歯科診療録の記載に基づき行われた。なお、初回来院時年度を調査対象年度とし、治療途中で年度が変更した場合については、治療終了時までの処置内容をすべて初回来院時年度における処置に含めて統計処理を行った。また、治療終了後、定期診査時に行った歯冠修復処置については、今回は調査対象より除外した。また、1歯に対して同時に2種類の歯冠修復処置を行った場合は、2種類とも歯冠修復処置数として算定した。

結果及び考察：3年度の合計でみると、1)、各種歯冠修復処置法中乳歯については、コンポジットレジン充填、既製金属冠、インレーの順で、また、永久歯については、コンポジットレジン充填、インレー、アマルガムの順で多用されていた。2)、乳前歯については、コンポジットレジン充填、コンポジットレジン冠の順で、また、乳臼歯については、既製金属冠、インレー、コンポジットレジン充填の順で多用されていた。3)、永久歯については、どの歯種についても、コンポジットレジン充填が最も多く用いられていた。4)、コンポジットレジン充填の使用頻度を、年齢別に見ると、乳歯では、3歳児、4歳児、5歳児の順に多く、永久歯では、9歳児、10歳児、13歳以上の順に多かった。

演題 6

本学小児歯科診療室における各種歯冠修復処置に関する実態調査

(II) 診断名別・歯面数別処置状況

○有富匡子・細矢由美子・古澤潤一・城臺維子・後藤譲治
(長大・歯・小児歯)

目的：近年、小児の齲蝕罹患率が減少してきたというものの、いまだ小児歯科診療において歯冠修復処置の占める割合は高い。今回我々は、昭和58年度から昭和60年度の3年度に亘り、本学小児歯科診療室で乳歯並びに永久歯に対して施された各種歯冠修復処置状況について実態調査を行った。そして、診断名別及び歯面数別処置状況を調査した。

調査方法：診断名の分類としては、通常臨床で用いられている齲蝕症第1度から第4度までの分類を用いた。

結果及び考察：1)、年度別に各種歯冠修復法の使用頻度を比較すると、乳歯並びに永久歯共に、コンポジットレジン充填の使用頻度が年々増加していた。これに対し、アマルガムの使用頻度は、年々著明に減少していた。2)、3年度の合計でみると、齲蝕症第1度の歯牙に対する歯冠修復処置の使用頻度は、乳歯では、コンポジットレジン充填、インレーの順に多く、永久歯では、コンポジットレジン充填が圧倒的に多かった。3)、同様に齲蝕症第2度の歯牙に対しては、乳歯では、コンポジットレジン充填、インレーの順に多く、永久歯では、コンポジットレジン充填、インレー、アマルガムの順に多かった。4)、齲蝕症第3度の歯牙に対しては、乳歯では、既製金属冠が1番多く、永久歯では、コンポジットレジン充填、インレーの順に多かった。5)、齲蝕症第4度の歯牙に対しては、乳歯では、既製金属冠とコンポジットレジン冠が多く、永久歯では、既製金属冠と全部鋳造冠による歯冠修復処置が多かった。6)、歯面数別に各種歯冠修復処置の応用頻度をみると、乳歯並びに永久歯共に、コンポジットレジン充填は、歯面数が特に1面と2面の場合が多く、インレーは、2面～4面の場合が多かった。